まを102007







美意延年 山田正平





魂 白 ま き つ 船

り

升

瓶

と

立

膝

と

東

京

佐

藤

喜

孝

Z < 5 0) げ 湖 に を ŧ いく 火 つ 急 か 0) と は

き

B

か

L

ぎ

を

り

出

る

と

白

き

船

區 蜩 役 に 所 水 0) び 窓

 \Box

に

あ

る

秋

0)

晝

た

し

な

る

森

0)

中

阿 久 悠

あ 八 れも 朔 Z B れ 呵 昭 Ł

久

悠

硬

派

全

う

す

東

京

赤

座

典 子

注 栗 銀 食 漢 目 め

B 0) り

皮

Щ

盛

り

に

積

み

な

が

5

和

謳

 \mathcal{O}

L

五.

千

曲

뎨

久

悠

0)

詩

力

ン

ナ燃

ゆ

若

手

善

戦

秋

0)

暮

晴 列 工 ス 秋 *)* \ ン ル つづくつくつくこ 1 0) 0) グ ビ 兩 ル 先 ス スの 夕 0) の 最 ド 餉 マイウ 火 ラ 後 0) 種 マ ふ 0) で 泣 ふくら エイ た V 審 きし り 判 聴 0) 寡 む < 夜 鳴 暑 黙 秋 き急 八 長 き な 月 暑 か な ぐ 秋 尽 L り 東 東 京 京 遠 安 部 藤 里

子

さ

わ

さ

わ

と

風

揉

み

入

れ

L

萩

0)

道

折

紙

0)

裏

0)

白

さ

B

天

高

婿

顔

で

通

た

半

生

梅

擬

秋

0)

灯

B

書

架

に

寝

た

き

り

砂

時

計

実

白 鮎 斎 本 桃 を を 堂 を 食 受 0) 3 つ < 畳 る 儀 棚 式 り を 経 と 0) 灼 剥 B 僧 い う い 0) 7 に 7 紟 癒 箸 大 あ え つ 西 を 近 か V L 日

鎌

倉

0)

大

町

小

町

額

0)

花

神 奈

Ш

鎌

倉

喜

久 恵

晩 甲 夏 子 光 亰 熱 闘

り

甲

亰

登子

順 糠 合 優 床 宿 待 勝 0) 0) 5 旗 灯 機 0) 準 嫌 0) 竹 は 消 優 葉 え か 去 亭

勝 れ 0) ぬ あ 旗 籐 炎 と 夏 0) 暑 誘 終 子 椅 蛾 か な 灯 子 る

> 神 奈 Ш 木 村 茂

う 打 数 笑 5 水 Z V そ は 0) れ 声 のこと起 バ 5 ば 聞 ケ 良 0) ツ Z 言 き に き 葉 事 え 浮 7 吐 ŧ る か L (J あ ぶ 写 ま た り 葉 真 お 茄 り < か 水 唐 づ 子 熱 鉄 帯 辛 か 0) 子 夜 な 花 砲

東

京

斉 藤

裕

子

炎 酷 天 下 レス 経 暑 を

唱

 \wedge

7

歩

み

け

り

東

京

篠

田 純

子

旱

道

吸 ホ 1 Z 足 \mathcal{L} 息 は 0)

夏 木 <u>\\ \</u> 執 夜 詰 事 鷹 に つ ŧ 0) 唾 7 書 B か 了 生 け う ふ ŧ 5 な 居 炎 れ る

天 暑 花 か な

た 時 代 粉

襟

Z 太 お 鮎 鮎 さ 千 寺 訥 秋 る と 釣 と 子 釣 0) 町 々 祭 すべ り に さ B 様 音 0) と 太 鮎 魅 5 吹 0) み り 坂 物 せ 慈 鼓 に 紅 き な お ゆ 5 L 語 紅 の _-曳 笠 む れ 渡 涼 る 茶 り ご 過 も る 風 B < 樹 芳 を ぎ と 杖 風 と に か あ た り な 親 ŧ 始 に 今 つ 夫 吅 り 玉 片 ま 炎 父 朝 か 在 に < 0) 天 か れ 蔭 0) \sim り け 秋 下 も り る り 汗 り 東 京 芝宮須磨 芝 尚

子

東

京

子

天 榛 水 目 お 0) を 0) <u>\f</u> h |||撒 木 屋 Z < 近 ŧ 0) に 金 L お 遙 炎 燭 次 茶 か 昼 漬 蛾 郎 点 0) 今 は 像 嶺 す 日 と に は 色 ŧ び Ł パ 終 な 撒 た IJ 戦 き 7 い 祭 る 7 灯 日 で 石 Ш 定 梶 じ

よう

蝉 払 下 涼 百 暁 Щ 風 時 を Þ 0) せ 雨 待 只 Щ L 夕 つ \mathcal{O} 7 光 日 み た 大 岳 h す き ょ み 5 < hり に

鳴

き

始

め

虹

O

橋

百

0)

Щ

埼

玉

須

賀

敏

子

屋

敷

林

熱

熱

に

干

さ

れ

L

梅

を

裏

返

す

秋 北 土 室 今 雲 敗 玉 パ 室 ン 条 温 時 音 あ 湧 戦 に 0) 氏 27 は 放 \exists か \mathcal{O} 耳 度 ネ 0) 送 んや 食 父 7 ね と 岩 ッソ 意 ベ 関 穂 泣 室 き り \vdash 味 ゐ 分 門 と め 夏 で 高 < 7 古 気 う 7 探 5 管 姿 連 酒 づ ぐ 暑 ず す 理 峰 焼 < 置 V に に 蕎 V 原 室 夏 付 す 麦 炎 耐 7 爆 無 木 い 猛 0) 天 あ 0) 店 <u>\</u> る り L 7 下 日 東 埼 玉 京 竹 鈴 木 内 - 多枝子 弘 子

梅

土

器

0)

つ

ぎ

目

0)

L

ろ

じ

ろ

لح

雨寒し

和

ま

げ

7

木

0)

実

を

2

ぼ

L

け

る

脚 面 な 仰 白 蕎 ま 風 飾 八 蟬 八 か 向 壁 麦 た り 少 壁 月 本 ま 窓 に に 食 鳩 B 足 0) 0) \wedge 蝉 天 ベ が あ 月 帽 5 0) 達 0) 唇 為 出 7 り 子 読 め か 0) 祭 7 乾 磨 と と 0) 経 さ 蝉 0) 鳴 は に 疲 炎 九 き Z 0) 町 < ぎ (J れ 暑 そ 時 年 止 を 目 夕 0) 計 風 ま 後 ぎ 女 か 蝉 が 水 に 熱 Oり 蝉 郎 な 乾 七 道 時 意 た せ 帯 蜘 か 蛛 に 年 醎 り り 夜 屋 な き 東 東 京 京 東 田 中 亜

未

藤

穂

九 浄 \mathcal{O} 涌 老 晚 浄 き 體 域 つ 鶯 瑠 水 じ 佛 0) B 璃 0) 草 慈 氣 夏 寺 浄 池 品 愛 水 0) 瑠 < す 甕 彼 璃 岸 ま が 0) 寺 に つ な L 亀 \sim < き B 0) 0) 花 萩 幾 子 石 桔 百 0) 群 風 梗 年 れ 畳 埼 三 玉 重 早 長 崎 崎 泰 桂 江 子

た 大 雲 炎 糠 文字の条良高円山の峰の 床 だ 天 0) 見 茄 0) 舞 姿 子 跡 Z 電 あ B 薬 を ざ 柱 0) さ 師 B

鴉

不

在

な

り

か

に

0)

Z

り

け

り

寺

0)

塔

夕

映

え

Z

せ

L

晩

夏

0)

山

L

き

奈

良

0)

Щ

ど 赤 子 B 朝 と か 等 0) 顔 な h 道 は 0) け ぼ ŧ だ (J り 佐 真 L 使 0) 渡 つ は 5 運 \sim す ず 0) 向 動 と ぐ ってつぎつぎ 会 永 決 に 0) さ めつづれ 見 え 水 空 を が 後 遣 あ 0) さ に る 月 せ る

東

京

堀

内

郎

吹 朝 大 き 採 花 抜 り 火 け 0) 光 0) モ 0) 口 \Box テ ビ コ 1 イ シ に ア 並 憩 ラ ぶ ふ 大 道 夏 空 0) 0) 湖 駅 に

夏

0)

Щ

足

湯

に

揃

Z

ツ

]

IJ

グ

鈍

感

に

生

<

る

術

な

L

猛

暑

0)

日

東

京

森山

0)

七 む ゼ 山 噴 伽 池 首 小 口 那 さ ツ 陰 羅 節 振 0) 刻 プ 水 さ ケ 0) 蕗 つ 水 み 虫 ウ び ン 口 7 B 0) エ 飲 0) 0) 須 に 0) ッソ 味 顔 機 h 翅 嘴 秋 大 降 ジ が 這 で 敏 き を 風 に 太 尾 ふ 7 < 入 守 動 に \mathcal{O} を 蟻 見 れ 飛 鴉 動 宮 か あ を 引 び 7 hぐ < 0) す < 守 \langle 隣 草 で る 秋 舌 黒 宮 秋 虫 ス 星 秋 に 舐 揚 0) 拒 0) 時 月 丰 0) 1 夜 風 夜 雨 来 聝 り 否 羽 東 京

吉

成

美代子

東

京

森

理

和

1

1

り

銀 大 蝉 た 身 斑 八 靴 九 妻 ょ Þ 0) 0) 竅 O仏 月 猫 全 り h 月 に 跡 0) 0) 0) 身 あ B ま 部 砂 梅 Z Z 汗 胎 0) メ 袋 蠅 B 場 雨 ま 眼 瞳 内 モ に 0) に か を 小 に < ŧ < 蝉 慕 憲 紙 L 戸 路 鳴 5 は き づ 0) に 隠 7 か れ < \langle 法 0) が 声 置 せ 知 昼 き を 傾 将 秋 る 満 < 寝 終 満 九 斜 に 妻 棋 7 F 戦 々 な 覚 0) 入 す 汗 条 盤 り る 8 15 日 す 埼 玉 渡 吉 邉 弘 恭 友 七 子

東

京

九月作品より

竹内弘子・佐藤喜孝

梅雨茸の百會に雨のたまりゐる

佐 藤喜 孝

像で観たおぼえがある。 のをのせ、艾に火を点けて、灸治療をしている様子を映 ぼをはずす」などと言います。頭に素焼の皿のようなも あり、灸をすえる「壷」でもある。「つぼを押える」「つ 「百會」、頭の中央(脳天)のくぼんだところ。急所で

雨が溜っているのでしよう。 笠のひらいた大きめの茸の「百會」はみごとに凹んで、

日輪のかけらの如く風花舞ふ

渡 邉友七

するという。「風花」が晴天にちらつく雪ということか 灼熱の太陽とも言われる「日輪」の表面は六千度に達 前後の矛盾した面白い一句がうまれました。

縄文のビーナスに会ふ巴里祭

この夏、

日本では「巴里祭」といわれ俳句の季語にも

赤 座 典子

> 素朴そのものの土偶と、その対極にあるような華やかな を観てきた。七月十四日は偶然だったが、胸もあらわな た「尖石縄文考古館」で、さまざまな「縄文のビーナス」 なっている、フランス革命記念日の七月十四日に、 高原へ吟行した。八ヶ岳山麓に花開いた縄文文化を集め 「巴里祭」が同じ日であることに感慨を覚えたのだ、と 蓼科

私は思った。 (汝が胸の谷間の汗や巴里祭

絵手紙の南瓜の威風堂々と

木村茂登子

楠本憲吉

キ)

はみるみる小さくなる。

イギリス騎馬隊の行進曲 紙の南瓜」だ。下部いっぱいに南瓜を置くと、紙(ハガ が、紙をはみ出さんばかりに描かれているのが、「絵手 エルガーの「威風堂々」より堂々としている。 南瓜」が繊細に描かれている絵があるかもしれない

梅雨晴間子持ち鰈を煮る匂

芝

尚子

匂いが、どこからともなく流れてくる。腸をのぞき、 夕方歩いていると、「子持ち鰈」を煮る甘辛い醤油 卵 0 まったのだが、東西に広がる日本では長続きしなかった が燃料不足対策として、時計を一時間進めたことに始

を持った小ぶりの鰈を煮たものか。魚屋の小父さんに、 らしい。

火でゆっくり煮あげるのだと教わった。 魚から出る水分と砂糖と醤油の煮汁を掛けながら、とろ

手桶の水切って手渡す濃竜胆 芝宮須磨子

じに、一家の長老らしい厚みがみてとれます。 のようだ。水を切って差し出す動作の、きりりとした感 鮮やかな「濃竜胆」を手渡したのは作者に極く近い方

踏台やサマータイムといふありき 定梶じょう

くらい、途中に足掛りが一つあって、上は大人の両足サ イズ。下部の太い所は丸い穴があって紙屑など捨てるよ 「踏台」を使った覚えがある。 ピラミッド風で60センチ 子どもの頃、 高い所のものを取るために、 かならず

27年までで、ぼんやり覚えている。19年、 サマータイムが日本で実施されたのは、 ていた。 うになっていた。大人は柱時計の発条を巻くのにも使っ イギリス議会 昭和23年から

麦秋といふに小さき畑一枚

紙、

板、

貨幣、

田畑など、平たいものを数える単位を

「枚」というらしい。見渡すかぎり広がった「麦秋」と

呼ぶにふさわしい広さではないが、手塩にかけた大切な 一枚の麦畑なのでしょう。耕作しておられる感がある。

黄の薔薇の名はジーナ・ロロブリジーダ 長 崎 桂子

の名が付けられていることがあるが、ジーナ・ロロブリ

薔薇園などで、花の色や種類に有名な王妃や映画女優

咲ける騎士道」はもう一度みたい映画だ。 魅力があった。ジェラール・フィリップと共演した「花 ジーダはめずらしい。 美貌と均整のとれた肢体は、ハリウッド型女優にない

高原の山烟りたり栗の花

崎 泰 江

早

八ヶ岳山麓の茅野市にある「縄文考古館」を観てき

た。あいにくの雨で辺りいちめん烟っていた。「栗の花」 のみ雨を含んで重たげに花穂を垂らしていたのだ。とと

のった佳句 敬老の日席ゆづられて断りて

堀 内一 郎

中七以下、淡たんと、平生と変らぬようにのべる。断

郎氏らしくしているだけだ。ちょっとほほえましい

固ことわるというわけではない。

風景ではありますが。

透きつ歯の越後訛や溝浚

吉

弘恭子

意に添うように思える。

むかしから、越後の人は骨身を惜しまずよく働いたそ

が、その中に越後の人がいらしたのでしょう。 をよくするために、近所の人たちで溝を浚ったそうです うです。夏になると水溜りなぞ蚊が発生するので、流れ

死の前に橋を渡りし水中花

亜 未

東

かる橋なのであろう。その橋を死の前に渡ってしまった

死後に渡る橋があるのであろうか。此岸から彼岸へ架

大きくなってくる。(ここから喜孝) 人がいる。なんともせつない話である。 水中花の存在が

あの世この世一緒に願ふ梅雨の寺 森山のりこ

だ。梅雨の寺を紫陽花寺などにするとすこし鑑賞者の句 も仏様は度量が広いから許してくれることだろう。そう にお願いしている。切実であるが、欲張りでもある。で いう願い方に作者も愉快がっているところがあるよう この世のねがいごとのついでにあの世のことまで仏様

塵紙を丸めてぽいと木槿散る

森

理和

木槿の花の散りようを的確に捉えている。ものをよく

住んでいるが、そのような環境でも身辺の花や鳥、虫な 見る、ということはそのものに関心があるということ。 「ぽいと」におかしみが集約されている。作者は都会に

である。 どに関心を持っている。そういう日常からうまれた一句

磨

子

子

子

ょ

う

螢 鴉 素 繋 大 郭 拗 夏 釣 逢 白 岩 ね 袷 が 公 0) \sim 蝶 籠 忍 語 た ば 魚 0) を れ 霧 0) 深 か で ょ 訣 池 呼 き L 神 上 夜 か に 交 に れ ŋ 人 ぶ を に 昼 0) げ 餇 万 す ŋ 乗 声 黄 誘 0) 余 和 は 0) 子 着 せ V 5 蝶 は れ 震 菓 風 ち ح 7 れ 0) つ 鴉 7 花 揺 子 ろ な 行 も か 1 み 手 朝 0) ŋ 屋 < す < 後 そ じ に 声 ま 7 開 ぎ 男 炎 ろ れ ろ 炎 B だ け 店 か 天 ゆ が か ん B ま ŋ き な 下 ず ら ず ぼ す す < 芝 芝 定 篠 木 鎌 遠 安 赤 渡 佐 宮 梶 村 倉 田 部 座 邉 藤 藤 じ 須 茂 喜 尚 純 里 典 友 喜



久

恵

実

子

子

七

孝

登

子

前月作品

庭 死 大 シ 噴 ヤ 0) 正 煙 涼 IJ 琴 も 前 シ L ヤ に 聴 涼 IJ 市 橋 か l と 麦を 松 < を せ 渡 ζ 見 模 川 ŋ え り れ 様 つつ L l 7 苔 水 を + 步一 と 中 魂 勝 花 祭 歩 岳 石

鈴

木

多

枝

子

須

賀

敏

子

東 長 田 中 崎 亜 桂 藤 子 未 穂

喜孝 抄



大

蚊

0)

透

け

7

脚

か

5

ぬ

け

お

5

る

吉

弘

恭

子

音

ŧ

な

ζ

白

睡

蓮

に

風

渡

る

吉

成

美

代

子

塵

紙

を

丸

め

て

ぽ

v

と

木

槿

散

る

森

理

和

あ

0)

世

ح

0)

世

緒

に

願

z

梅

聝

0)

寺

森

Щ

0)

り

Z

阿

波

踊

が

き

7

東

京

が

淋

l

す

ぎ

る

堀

内

郎

物

が

た

り

め

き

た

る

土

蔵

梅

雨

は

げ

L

早

崎

泰

江

をなかな

光は木々にさし込みぬ

わ

さび

田

に

水

車

気怠く

廻りをり

朝

涼

鈴木多枝子

安 安 雲 曇 曇 厚 野 野 き は は 信 咲 濃 女 きは 松 に じめ が を り 多 る L < る稲 蝉 青 時 胡 0) 花 桃 雨

蜩 松 毬 0 敷きつ 声 に つ め ぶ 5 れて さ れ 山あぢさゐ さう な 宿

か

な

か

な

B

極

楽浄

土に

居るごとし

吉 弘 恭

子

女坂の易者の欠伸藤日和

女坂に男の易者が座っていた、と思う。何で男と思ったのかというとわざわざ女坂という語を

持ってきたのだ。

を当てて欠伸はするものと親から教わった。藤の花の咲いている様と、男の欠伸の何とも妙な取 を思いだした。途切れることがない人がいれば欠伸などするはずもなく、ましてや女性は口に手 り合わせが面白くおかしかった。 くおばさんに見えた)がいた。何をみんな見てもらっているのだろうと、横目で通りすぎたこと かの有名な新宿の伊勢丹の処に立って手相を観てくれるおばさん(高校の帰りに見たのですご

夕涼み昔の顔の根津の猫

が優しい顔立ちだ。昔の顔という表現はむずかしいが、根津という地名と夕涼みという言の葉に している。ペルシャ・シャム・アビシニアンなどと違って鼻は低く見た感じぺしゃんとた感じだ、 て合図する。帰ってきた時は前の家の木斛の木の上で待っている。この猫は昔からいる猫の顔を 我が家には一年半ぐらい前から毎日野良猫が来る。出て行きたい時には、ドアに前足を伸ばし

巻き舌の客引き湯島熱帯夜

よってグンと生きている。

も聴かれるかもしれないが、威勢よく声をかけられるとその気になっ 巻き舌というと江戸っ子独特のように言われている。今ではどこで

だ。言葉は生きているものだ。 巻き舌という語も時には俳句になると又違った感じに生きてくるもの てしまうかも知れない。天神下から上の池之端にかけての花街は婦系 図に出てくるところ。熱帯夜でも鯔背な声で暑さも吹き飛ぶようだ。

助動詞「し」のこと

定梶 じょう

私なりに敷衍して、もう少し文を続けたいと思いまりである、という言葉に尽きるのです。そこの処を文法と錯覚し、あるいは思いこんでしまう』のは誤去のすべての時代、すべての地域のことばに通じる者・小林隆さんの『古典文語文法を、現代以外の過者・小林隆さんの『古典文語文法を、現代以外の過者・小林隆さんの『古典文語文法を、現代以外の過

続したもの、と理解すべき句でしょう。しかし、形ら、形容動詞「したたかなり」に助動詞「ぬ」が接この句、「したたかに鳴った」という意味でないな〈馬の尾のしたたかなりぬ雪がふる〉 雨宮きぬよ

すので、ご辛抱下さい。

動詞全般が直接つづくことはないわけです。それがい、というよりも、基本活用形の『ク・シク』に助とは古今例がありません。「美くしぬ」とは言わな容動詞や形容詞に直接「ぬ」や「つ」が接続するこ

すから、みんな当たる、という言い方が今一つ腑にき酒」は日本酒の味、香り、色等を鑑評するものである方がとりあげて大変褒めていらっしゃった。「利がみんな当たって〈つまらなし〉なる意味の句を、能村研三さんの句で申しわけありませんが、利き酒

に焦るあまりの間違い、と言えそうです。またまたに焦るあまりの間違い、と言えそうです。またまた時間の経過に無関係に物の性質、状態を述べる品詞。いている、という時間の経過を含んだ言葉ですから、いている、という時間の経過を含んだ言葉ですから、形容詞に直接続けることは撞着であり、古代の人々形容詞に直接続けることは撞着であり、古代の人々形容詞に直接続けることは撞着であり、古代の人々形容詞に直接続けることは撞着であり、古代の人々の場所できて以来の約束です。が、今は「ぬ」の日本語ができて以来の約束です。が、今は「ぬ」の日本語ができて以来の約束です。が、今は「ぬ」の日本語ができて以来の約束です。またまた

してしまったものでしょう。つまるところ文語表現 し」を混同し、「つまらなし」を文語的表現と誤解 かしい。口語の助動詞「ない」と文語の形容詞「な ませて今はよしとして、結句の「つまらなし」がお

落ちませんが、ワインででもあろうかと想像を膨ら

に焦るあまりの誤用。

肘張りて新酒をかばふかに飲むよ 中村草田男

柄杓から直接飲んでいる情景です。文語表現へのも

のほしげな処が一切ない。

ところで、片山由美子さんの論をとりあげるのは

続くものであるのもかかわらず、四段活用の終止形 中にあるという。 たちだが、ただしい文語表現を読む訓練をしていな につけている例を見かける。さすがにこれは若い人 うにも抵抗を感じる、という文章が片山さんの論の もうやめにする筈でした。けれども若い友人が、ど 「『かな』」という切字は体言か活用形の連体形に

> がない。教わった文語表現を忘れていない。また片 ことになる。」そして若い友人がこの片山論に反論 「私達は受験勉強を経験して先輩方よりはまだ間

いと、自身の句が不自然かどうかにも気がつかない

その通りであるだけに、私は苦笑するより仕方がな ういう方法で終止、連体の判断をなさるのか」と。 るが、終止と連体は同型。『走るかな』とある時ど 山さんは、四段活用の終止形云々とおっしゃってい

なめてはいけないということでしょう。 やろうかという青年たちの方がしっかりしている。 かったのです。私達の青年時代より現代の、俳句を

のことです。 さて。過去とか回想の助動詞と通称される『き』 稲雀五重塔が見ゆるかな 中川句寿夫

このことについては以前、 佐藤さんにお手紙をさ

しあげたことがあります。

れた山口明穂さんが、三〇数年前刊行の概説書で明 ともまた稀なのですが、のちに東京大学教授になら りません。そして国語学者がこのことで発言するこ 表現する助動詞、としてあつかうことはほとんどあ 現代、文語をつかう文芸で「き・し」を、過去を (一〇〇〇句ほどでしょうか) 中、「し」を使用した ここで、芭蕉の句についてのある資料があります。

快に以下のように説明しています。

平安時代に遣われた助動詞のかなり多くが姿を消

去の意の)「し」に、それがいつであるかを明 連体形「し」はかなりあとまで使われた。 (過 してゆく中で、

あり、そのあとには単なる『文語的表現』と 薄になっていった、という事実が室町期には 在の事態に通ずるものになり得た。 それは(口語完了の)「た」の意味に通じ、現 示する(昨日、去年などの)語がなければ、 即ち、「過去」の感覚が助動詞の次元では稀

と言っても大げさなものではなく、芭蕉の全発句

で遣っている句が三句。 九句。現代人の目でみると意外に少ない。過去の意 ると、一○○○句ほどの発句中「し」を遣ったのは あるのですが、少なくとも今は役に立つ。それによ めにこういうことをしたのか、自身忘却のかなたに 句を抽出したもの。四○年前のことですので何のた

としてつかわれている。 などはそうでしょう。残りが単純に『文語的表現』 衰や歯に喰あてし海苔の砂 柴附し馬のもどりや田植樽 芭 芭 蕉

蕉

ということ。 を持ちつつも単なる文語表現として遣われていた、 そういうわけで、芭蕉の時代、「し」は過去の意味

して使われることになった。

た小説家には、時制に関わらぬところで「し」をつ そして明治。幸田露伴はじめ、文語で文章を書い

かうことが多い。江戸時代よりも過去の意識が稀薄

ごめんなさい。

藤村詩抄には になっているわけでしょう。 島崎藤村に例をとります。すこし長くなりますが

のでしょう。そして、

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。

ません。読みすすみますと、 然ながら「ごとくなりき」は過去や回想ではあり得 …」は当然ながら冒頭の句を受けたもの。そして当 に始まる、有名な自序があります。二行目の「そは

されどまた偽りも飾りもなかりき。

にきっぱりとして力強い韻きを意図して利用したも ではなく「き」です。案ずるに、これらは藤村が「き」 とあります。無論「過去」の意はありませんし、「し」

かかるおもひでの歌ぐさかきあつめ、 われは今、青春の記念として、

するなり。 友とする人々のまへに捧げむとは

まだあげ初めし前髪の

と、否です。藤村の初期の頃の詩に『初恋』があり はもう過去の意は廃れてしまっていたのかという で終ります。実に堂々たる文です。では藤村の頃に

林檎のもとに見えしとき

その芸術は幼稚なりき。不完全なりき。

新しきうたびとの群の多くは

たゞ穆実なる青年なりき。

花ある君と思ひけり 前にさしたる花櫛の

林檎をわれにあたへしは やさしく白き手をのべて

薄紅の秋の実に

人こひ初めしはじめなり

云々、とつづきます。冒頭の「あげ初めし前髪」は

髪をあげてしまっている。これに「まだ」の語を冠

ぐすことにして、これらの「し」は回想として読む すること、平仄があわぬわけですが、ここはよみす

べき。眼前の景とすると甘美に過ぎましょう。そし

おのづからなる細道は 林檎畑の樹の下に

誰が踏みそめしかたみぞと

問ひたまふこそこひしけれ

の使用の多い時代になります。 詩はありませんので、充分心得てつかっている。 で結びます。藤村にはこの他に「き・し」を遣った そして虚子以降の現代。収拾のつかぬくらい「し」

りますが、大凡は過去や回想の意味を持ちません。 のように、しっかりと「し」をつかっている句もあ 馬ひいて兵たりし街冬ざるる てんと虫一兵われの死なざりし 安住

どはそうでしょう。 増えてきます。次句、 〈石鹼玉吹いて未来を見むとせし〉 藤井英美

語調をっとのえるためだけに「し」をつかう傾向も

ように、これらの「し」をかたはしから否定なさる 『日本語を知らない俳人たち』の著者池田さんの

ような方もいらっしゃる。

わってくることがそんなに珍しくない。現代の句に 上二段活用です。このように時代によって文法の変

である、とするのは現在の国語学者の定見といって の判断基準を「学校文法」にのみ求めるのは間違い そのことば遣いが「文法の誤り」であるかどうか

いいでしょう。ことばの歴史、変遷を理解、

『恨む』という動詞。

もいらっしゃいました。そういう方にうかがいます。 るという点が全く欠落している専門家は、今までに

近・現代には「恨まない」「恨む時」「恨めば」と活 用しました。『奥の細道』に、「松嶋は笑ふがごとく

なかに人をも身をも恨みざらまし」 藤原朝忠 が は連体形に接続するのが古今の約束ですから、 象潟は恨むがごとし」とあるそうです。「がごとし_ 恨む」は連体形。従って四段に活用することば 方、百人一首に一逢ふことの絶えてしなくはなか

なしっ尾を引きずっている故なのです。

句に「満たず」「満ちず」両用が表れるのは、そん

あります。これは「恨みざらまし」とありますので、

恨みず」「恨むる時」「恨むれば」と活用すべき語。

から二段に移行する境界だったのです。現代でも俳 うどこの辺りが「満つ」ということばの、四段活用 は二段活用。法師も呆けをったか、文の法をまちが なれども磯より潮の満つるが如し」。この「「満つる」 たず」は四段活用。すこし前の段に「沖の干潟遥か してつひにものに誇ることなし」とあります。「満 れるのでしょうか。『徒然草』に、「志常に満たず へてをる、なんぞと言ってはいけないのです。ちょ 「恨まず」とつかったら、文法を知らぬ俳人といわ

漢 訳蕪村 (秋の旬)

王 岩

秋 日 正黄 音 紫 狐化 作佛一 尊

寂

々

寂寥勝去年 秋 日正黄香

秋 のくれ

仏 に化 る

狐

かな

去年より又さびしひぞ秋の暮

参考: 今年花似去年好 去年人到今年老。 始知人老不如花、 可惜落花君莫掃。

岑参

しむや横川 のきぬをすます時

身に

十三夜の月を賞することは我日のもとの風流也けり

唐人よ此花過てのちの月

唐人約

此花開後有明

月

九月十三依嬋娟

賞十三夜月乃我日本之風流也

横

ÍЦ

濯

衣時

秋冷

寒徹骨

> 遍繞籬邊日漸斜。参考:1秋叢繞舎似陶家、

此花開後更無花。不是花中偏愛菊、

林羅山・「九月十三夜」

2月与中秋名並傳、 大唐国里無人賞、几望已似十分圓。 今夜我朝数宿天。 元積·「十月菊花」

あをかき集

点水日 母向水

選 (六人目以降五十音順

堀内一郎

ル ブ 1 ル 0) 日 向 水 早 崎 泰 江

早

崎泰江

遠 ふ き 水 旅 母 か 寂 な か 水 族 な 館 り

母

に

は

面

を

漂

袁

ビニ

1

子

蛙

0)

点

ほ

ど

0)

目

動

き

を

街 白 水 海 保 育

暑 壁

L に

交 泥

差

点 Þ

ゆ と

<

盲 刺

導

犬 り

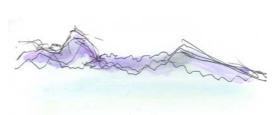
点

梅

O

痕

が町に明るさを置いてゆく。 の行き合う景に愛情の目が注がれる。 気負わない真面目さが爽やかで、見るも 梅雨の痕に被災地を思い盲導犬の従順さ 作者は安定した境にあるようだ。



蒼 水 母 海 舞 0) V 水 戦 母 は 艦 平 大 和 家 0) 0) 落 鎮 魂 人 歌 也

妖 婦 め < 水 **∃** 0) 泳 ぎ に 刺 か Z

 \exists 向 水 ぐ ら り 傾 ぎ 鳥 つ 3 さ 7

 \exists 向 水 表 面 張 力 0) 不 確 か

水 洛

母

行

く生

ま

れ さ

な さ

が

5

0)

人 廻

旅 す

安

部

里

子

中

0)

点

を

 \wedge

に

鉾

バ シ ヤ ス ワ 停 1 0) 浴 車 び が 廊 は 下 ね 点 る 々 日 孫 走 向 る 水

七 夏 気 負 象 月 け 図 0) 0) 0) モ 点 点 1 滴 と ル 受 線 け ス あ 7 信 る 生き 号 大 点 暑 か と か \wedge 線 る な

地 大 日 引 向 雨 網 水 に 投 風 げ 0) 捨 ば 動 7 き L 5 に 節 る さ る 約 ざ 水 日 な 母 向 み か な す 水

今

日

ŧ

ま

た

草

0)

始

末

B

 \exists

向

水

長 崎

桂

子

実

遠

水母に歴史を語らせ、

戦争の悲しみを

遠

藤

実

ぬが京都の雰囲気を彷彿させる。 いが曖昧な世相を思わせる。 弱者の象徴になって妙。 反芻委させるに十分な作とした。 表面張力は難し 洛中、 水母が 語ら

安部 里子

一人旅、

さびしさも気軽さも諦感も人

は、 生に似る。 生命軽視の社会現象など赤信号。 頼もしい。 何か意味があるようだ。 孫が心の支えに平和が見えて 点滴は実感であろう。 政局を含め 七月に

長 崎 桂 子

草の仕事で良い環境にある。

旺

盛

な夏

草からのエネルギーも見逃せない。 「厨点燈」は固いので、「燈を点す」で

紙飛行機は作者の夢を覗かせる。 夢は

七 月 B 朝 ょ り 厨 点 燈

梅 雨 晴 間 点 と 消 え た ŋ 紙 飛 行 機 を

潮

引

い

7

水

母

が

残

る

浜

辺

か

な

鈴木多枝子

新 砂 浜 鮮 に な 打ち上げ 水 母 浜 られ 辺 で 干 てゐ 涸 る び 水 ぬ 母

在 サーファ る だ け ーの点となりゐし夏の で 顔 を 背 け る 日 向 水 海

さ 失 土 る 用 点 す 照 を ベ り 争 り 沸 点 薄 騰 と 紅 点 す 色 が る 0) 低 夏 < 点 描 0) な 画 陣 る

赤

座 典 子

青 空 0) ゆ 5 り と 傾 ぐ \exists 向 水

流 何 漂 灯 ŧ る Þ せ ふ 点とな ず り 0) 水 りゆく \Box 母 養 に 生 刺 夜 さ 日 0) れ 向 波 け 間 水 り

鎌倉喜久恵

大事にしたいもの。

鈴木多枝子

か、 し嫌いらしい。嫌いなものは嫌いなり。 水母が生き生きしている。 関係あるらしい。 日向水は蚊も育つ 海辺に近い

赤座

一典子

と言える。夏の陣も明確だしスポーツに て格調も備えている。 も傾倒の様子、若さ何よりである。 「低くなる」の断定は一歩踏み込んだ そし

鎌倉喜久恵

何もせず、さぞ退屈であろうが養生と

思えば納得できるし先人の知恵と思う。 「一日養生」私もその積りで生きよう。 句の裏に感謝のこころも窺えて佳品。

木村登茂子

海 夕

釣

り

0)

男

水

母

を

大

声

に

凪

0)

沖

に

点

陽

0)

落

5

る

点 点 人 滴 去 心 り 0) 0) しあとに 音 篭 な に き 金 リズ 水母 魚 0) \mathcal{L} 0) 鎮 日 乾 座 0) び せ 盛 を 計 る り り

木村茂登子

点 点 ク 呼 茶 1 0) ル 盤 吉 ビ ま 設 だ ズ 朝 茶 靄 点 0) 家 丰 豪 0) ヤ 華 ンパ 夏 腕 座 時 ス 敷 に

街 浮 ビ 1 い 燈 玉 てきて 0) 0) 点 落 滅 水 5 灯 母 7 ゐ に 蛾 月 る Ł 0) な 疲 高 り れ き 日 た ح 向 ح り 水

喜 雨 兆 す 大 きな 傘 0) 水 母 か な

お 子 麦 炎 0) ごは 天 茶 跳 0) 漬 ね h てバ きち は 点 食 ッ 景 と んと食べて日 ベ タも る L 跳 点 7 ね 7 滴 ポ 日 釣 ス 向 向 忍 水 水 1

篠

田 純 子

> も主役がいて読者を楽しませる。 偏らずいろいろ見せてくれる。 何 れに

サービスは見事。バランスを手中にした。 クールビズの簡素に対し思い きりの

定梶じょう

らにあるらしい。 言って良い。真の俳句の面白さは、 い日向水に命を与えた意外性の勝利と ビー玉に少年時代を感じるが、変哲な 中々出会えないもの。 ここ

定梶じょう

篠 田 純 子

思いきり明るい。 えてくる。 、の問い掛けでもある。 麦は体に良いと聞く。 点驚のよい時も悪い時も笑顔 日向水が鏡になって見 "跳ねて跳ねて" 作者自身の健康

で。

芝 尚 子

幼な子そして、ぼうふら・水母と小

点 子

数

0)

ح

と

言

は

な

V

で

夏

休

くらげ

0)

暗

き

運

河

に

迷

V

ゐ

る

日 向 向 水 水 た 早 5 も V 子 に 遊 子 ぶ 踊 をさ り だ な 達 す 芝 尚

子

荒磯の水母とろりといつつ六つ日 向 水 早 も 孑孑 踊 り だ す

毒

水

母

海

底

埋

む

温

暖

化

墓 漂 守 へる水 が 横 母に 目 で ŧ 似 過 る 暮 ぎ る 5 日 L 向 振 水 り 芝宮須磨子

点 終 と 点 な 0) り バ 走 ス る 0) 尾 車 灯 庫 に 裏 夏 白 0) 星 槿

柳

橋

Ш

面

0)

水

母

遠

き

日

に

句読点ひとつ違へて夏に夜

縁

側

に

ブ

IJ

丰

0)

玩

具

日

向

水

須

賀

敏

子

船 水 母 旅 浮 は < 越 岸 壁 前 に 水 聴 < 母 銅 \exists 鑼 本 0) 海 音

り 水 Ш は 垣 汗 牧 根 場 ح 0) 0) 涙 4 き Ł 0) わ 点 三 0) とな 角 大 盥 点 り

ょ

日 羊 嶺

向

田

中

藤

穂

蹄

の踊りに喝采を贈り飄々として生きてゆ大自然に生かされているから。ぼうふら動物に愛情を惜しまない。それは自身も

芝宮須磨子

遠き日こそ好き時代であった。はじめて、大曲でも昔は泳げたそうだ。い陰陽の計らいがある。柳橋と水母は私

墓守と日向水、ここにもそこはかとな

須賀敏子

ブリキの玩具、

自分ごとだが質素なが

建築も変わりもの足りない界隈に。も縁側があり水遊びも出来たものだ。

田中藤穂

も女性であろう。早く治して一緒に旅へ。ようだ。羅で年配の女性とわかる。患者水母の談合、政治家の会合よりましの

談 合 を 了 L 水 母 0) 姿 消

点 滴 B 羅 召 L 7 見 舞

期 テ ス \vdash 0 点 0) 夢 ょ り 醒 む る 客 す

ほ 夏

陽

ととぎす声

追

V

視

点追ひ

つ

け

ず

亜

未

や孫のジー 辺 0) 0) ľ り 点 じ ジーバ ょ り り ŧ <] バ らふ る 门 日 大 日 夕 向 向 <u>1</u> 水 水 東

天 子 太

動 鍼 日 灸 向 か 院 ざ 水 点 る 盥 字 ピ に 0) 張 工 力 ル つ 口 テ 7 0) 梅 谷 視 聝 中 点 じ 路 夏 め 地 祭 り 森

Щ

のりこ

日 水 蘭 槽 鋳 0) 0) 水 黒 母 点 0) 大 見 群 事 我 朝 に 0) 向 市 <

和

向 干 向 向 水 さ 水 水 たたみ る 猫 刷 きら が 毛 V しまま りと 屋 と 舐 0) 揺 \emptyset に 主 れ L 子 は る 7 0) 無 過 プ 日 愛 ぎ 向 ル 水 る 想 森 理

日 蛇 日

「じりじり」にで猛暑を表現した。日 東 亜 美

花かメロンか余計な詮索もしたくなる。

で賑やか。 向水がいちばん体験したようだ。子や孫

森山のりこ

調される。「谷中路地」現在は様変わり 動かぬピエロに祭りの激しい動きが強

向くの意識は案外本音か知れず。 と思うが思い出は常にあたらしい。

我に

刷毛屋にしても意外性への挑戦で変身。 類にある。今でも蛇屋はあるらしい。蛇、 命を賭けているので当然無口。 刷毛屋は手仕事の職人であろう。手に 森 理 和 私もその

吉成美代子

若さであろう、 記憶再現は鮮やか。

高

八 重 葎 間 隙 0) 妙 点 と 線

ブ 大 イ 輪 口 0) ボ 花 ッ 点 1 と 定 点 な 観 り 測 散 朝 る 焼 花 け 7 火

吉成美代子

日 向 水 ズ ボ ン 0) 裾 に 跳 ね 返 る

見 荷 えすい 上 げ た言 急 ぐ S 分け 漁 舟 並 B ベ 水母 日 向 か な 水

 \exists

向

水

蟻

0)

素

通

り

す

る

と

ح

3

吉

弘

恭

子

満 身 を 風 に ま か せ L 水 母 か な

越 前 水 **日** 点 呼 0) 列 0) 最 後 尾

交 発 ۱Ţ) 叉 点 0) 0) 漂 ま V に h 中 ま か に す ゐ 水 る 白 母 \exists か 傘 な

茜 B が 雲 7 流 消 れ ゆ 雲 隠 0) L 白 さ 田 と \exists 日 向 向 水 水

渡

邊

友

七

荒 愛 僧 海 を 0 海 怒 呼 号 び 0) ゐ 闍 る に か 水 水 母 **日** 消 か ゆ な

Ш

晴

れ

7

百

蝶

視

野

0)

点

ع

な

る

世界に遊ぶしかない。「大輪の花点」は 齢になるとそれが出来ない。 私 妄想の

吉弘 恭子

身にも跳ねかえる。

「大輪の一点」として十分。言分けは自

前水母の引用は今後への意気込みで期待 の素通り」で人が愚かに見えてくる。 「日向水」には苦労させれらたが、 越

が掛る。 作者常の域だが白日傘が目に止った。

渡 邉 友 七

は作者の胸の中にある。 ある。愛憎怒号に負けまいとする力強さ 任す姿勢が感じられる。 自然を見つめて離さない、 水母に重量感が なりゆきに

 \langle 5 げ からくらげへ わ た す 謀

佐

藤

喜

孝

點 日 向 と 水 な ぐらりとかし る いく つ ぽ h 道 ぎ若 0) 白 が 日 \wedge 傘 る

調 日 向 理 水すべすべ 場 0) 指 差 L と女児そだて 点 検 はた た け 神 り

竹

内

弘

子

 \exists 生 ŧ 向 0) 水 を け いく ひかへてゐ た い 電 話 しが 胸 に 水 は 母 さ か み な

子 は 点 0) 海 を だ 水 母 は 空 を 恋 敬 に 老 け ŋ

さ

ま

5

ぬ

ま

ま

日

堀 内

郎

 \Box 時 11 月 18 日 $\widehat{\exists}$

午前11時

集合場所 庭園入口

交

通

JR中央線、

西武線

国分寺」

徒歩2分

숲 場 句会場 未定

申込締切 11 月 15 日



あを吟行会のお知らせ

吟行地 殿ヶ谷尸庭園

国分寺市南町2の 16

T E L 042.324.7991

38

あを林檎 中央区 京橋プラザ

会 中野区 カフェ傳

母の日やわが身おしみてチョコレー みんみんが耳に棲みつくみことのり あつあつに干されし梅を裏返す ショーウインドウの帽子の疲れ晩夏光 山上湖いちまいづつひらく花火 生身魂諳んじてゐる尾瀬の歌 片時も母を離れず炎暑かな 外人墓地真っ白になる炎天下 終戦日砂場に靴跡くっきりと 真鯉一つ足して今年の鯉のぼり 鱧めしや月はおくれて出るさうな 青野ゆく夢に道連れなかりけり 茂り中隅に二宮金次郎 秋暑し避難場所めく美容院 森閑と灼くる都心や盆休み 藤 尚 敏 喜久恵 綾 弘 恭 7 子 穂

女郎花さらりと話す離婚歴 実献のよべし原爆の日のこの炎暑 藤穂稜線に叶息めらめら朱夏の終 東亜未首都高を唄って過ぎる熱帯夜 純子

七座句会 中野区 小川苑

中野坂上 佐藤喜孝 中野坂上 佐藤喜孝 連句勉強会 毎月第1日曜

(03-3368-4263) カフェ傳 森 理和 ・ 毎月第2火曜

東亜未(3446-2770) 白金台福祉会館B室 あを林檎 十二月第3日曜

小川苑 吉弘恭子 小川苑 吉弘恭子 (090-9839-3943)

殿ヶ谷戸庭園

(十一月)

調句会

さいたま市 岸町公民館

乾きたる貝殻子との遠き夏 藤穂子会や香りの高き桃ふたつ 綾子乾パンを非常袋に大暑かな 泰江

どくだみを真黒に乾す夏の果

弘

ている。定梶さんの話は、こんがらかった糸を丁寧にときほている。定梶さんの話は、こんがらかった糸を丁寧にときほにとって問題の助動詞の「し」を中心に話が進められった。今月は私

取り出して読んでいる。みなさんも、むずかしい話、関係なの話である。「し」について頭が混乱してくるとこの手紙をからすぐに懇切なお手紙をいただいた。それが今回の「し」からすぐに懇切なお手紙をいただいた。それが今回の「し」からすぐに懇切なお手紙をいただいた。それが今回の「し」でしてくれるので私のような者も目がひらけてくる。過日、ている。定梶さんの話は、こんがらかった糸を丁寧にときほ

されたが、今は順調に回復しているとのこと、一安心である。きた。お手紙の筆跡は若い人のようである。入院・手術をなこのあとがきを書いている時、定梶さんから校正が戻って

んなで渡れば怖くない」ではいけない。

てきたが、最近一歩止まってみるようになった。「赤信号みに対する注意力が増すと思います。違和感なく「し」を使っいことと思わずに興味を持って読んで下さい。きっとことば

ヒガンバナ科で学名はハエマンサスといい南アフリある。以下はインターネットの受け売り。表紙の写真は「眉掃万年青」という。珍しい万年青で

力地方が原産。明治の初期に渡来したときに刷毛の

ころから「まゆはけおもと」と呼ばれるようになったら面白そうだし、葉っぱが多肉質でぶっとくていたら面白そうだし、葉っぱが多肉質でぶっとくていたおしろいを落とし、まゆ毛を出して、今度はたそうです。それから改めて小さなハケでまゆ毛にたそうです。それから改めて小さなハケでまゆ毛にたそうです。それから改めて小さなハケでまゆ毛にかたおしろいを落とし、まゆ毛を出して、今度はいたおしろいを落とし、まゆ毛を出して、今度はいたおしろいを落とし、まゆ毛を出して、全人ではいるといたが、これで眉毛を刷ようなふさとが、

二〇〇七年十月号

たそうです。

(喜孝

電話の90-9828-4244発行所東京都中野区中央2-50-3発行日十月二十日

カット/恩田秋夫・松村美智子印刷・製本・レイアウト 竹僊房

00130-6-55526(あを発行所)会費 一○○○○円(送料共)/一年会費 一○○○○円(送料共)/一年

郵便振替